

奥多摩のせし

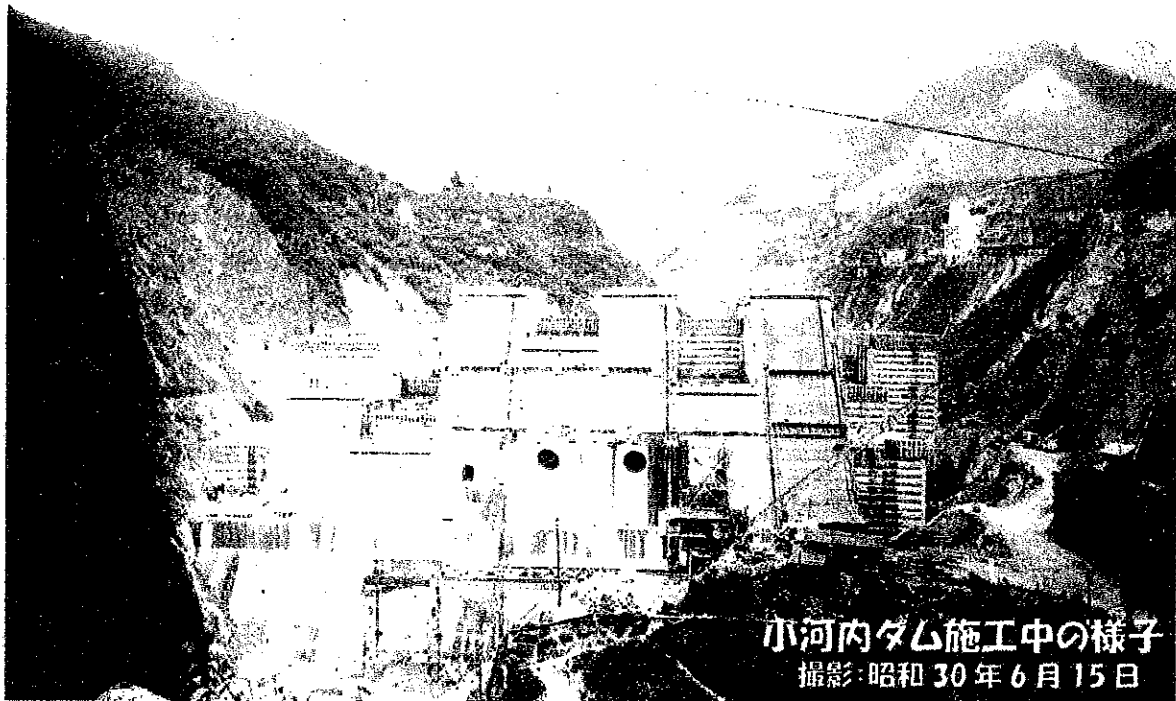


# 奥多摩

《第7号》

平成 19 年 10 月 15 日

奥多摩観光協会



小河内ダム施工中の様子  
撮影：昭和 30 年 6 月 15 日

写真提供：東京都水道局

## ～ 季節 だより ～

### 小河内ダムが 50 周年！

昭和 13(1938)年 11 月に着工され、戦時中の中断を経て昭和 32(1957)年 11 月に完成した小河内ダムは、この秋、しゅん工 50 周年を迎えます。

小河内ダム築造計画は、昭和 11 年 7 月に東京市の第二水道拡張事業が認可されたことに始まります。当時、市により不足するとされた給水量は 1 日最大 42 万 5 千 m<sup>3</sup> で、この水源を求めるために、新たなダムの建設が必要になったものです。新ダム築造に際して、当初、利根川等、関東一円の河川にその水源を求め調査しましたが、取水権を得ることが出来ず、東京府を縦貫する多摩川に求めることが決まりました。

このダム築造による水没地域は、東京府の小河内村(現・東京都奥多摩町)、山梨県の丹波山村及び小菅村の 3 村にまたがっており、他への移転を余儀なくされた住民は 945 世帯に及びました。子孫に残すべき先祖

伝来の墳墓の地を犠牲にして、村を離れた方々の労苦は計り知れないものがあります。

このダムにより生まれた貯水池は、後に「奥多摩湖」との愛称をつけられ、以後、東京の奥庭である奥多摩町の観光の一大拠点として、長く都民に親しまれています。

このしゅん工 50 周年を記念して、水道局による記念式典が 11 月 13 日にダム左岸広場内で行われます。4 月に開通した「奥多摩湖いこいの路」を散策がてら、式典に参加されたいかがでしょうか。青く澄む湖水と水際を彩る紅葉、そして高く澄む秋の空が、訪れる皆さんを歓迎することでしょう。(堀越弘司)



【資料：東京近代水道百年史(部門史)】

## ～ 来 さ っ せ ん ～

### 奥多摩湖いこいの路

行先：奥多摩湖右岸

開催日：11月6日(火)

先ず、JR青梅線奥多摩駅に降り立つと奥多摩の山々が出迎えてくれます。駅舎を見上げると何とも懐かしさを覚える事でしょう。町で出会う人達に気軽に声をかければ、笑顔が返ってくることでしょ。

駅前からバスに揺られ奥多摩湖へ。その道すがら幾つものトンネルをくぐり、バス停は「奥多摩湖」で下車します。

奥多摩湖は、当初小河内ダム(小河内村)と呼ばれ、東京都民の水がめとして誕生しました。

それから半世紀、いまでは都民の癒しの場となっています。湖畔(右岸)には水源林が広がっています。

このハイキングには、お弁当と飲み物、体力があれば何もいりません。

さて、コースですが、バス停から目の前のダムを右に見ながら歩き始め、堰堤を越え「いこいの路」入口に着きます。ここから「山のふるさと村」まで12キロの

道のりです。路面はほとんど平坦な路です。右側に奥多摩湖、左側に広葉樹林、西に向かって歩きます。

開催日の11月頃は秋真っ盛り。紅葉は高い山からだんだんと里へ下ってきます。

紅葉・黄葉と変化に富んで美しいです。路には発見がたくさんあります。樹木では、樹形・葉の形・果実と好奇心があればたくさん見つけられると思います。空に目をやれば青空と色々な形の雲、湖底には、むかし小河内村があり、人々の生活の営みと温泉場がありました。そして、野鳥の声も楽しめます。

入口から中間点の6キロまでは広い路で楽しく楽に歩けます。休憩してすこし行くと通称「ひょうたん島」があり、その見え隠れで奥多摩湖の水位が分かります。路は狭くなりますが歩き易く、樹木の下を歩くので森林浴に最適です。わさび田が左に見えたら、もう終点の「山のふるさと村」です。きっと達成感がいっぱいあふれることでしょう。

ぜひ「来さっせー」

(武田和代)

## ～ 行 っ て 来 た ん だ ～

### レンゲショウマをたずねて

8月3日、御岳山に咲くレンゲショウマを、丹三郎尾根から訪ねました。

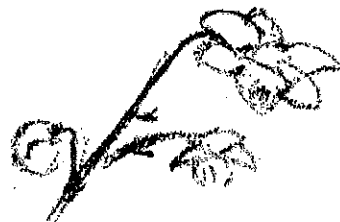
9時少し過ぎ、21名の皆さんと古里駅をスタートしました。10分ほどの車道歩きの後、獣害対策のゲートを通り山道に入ります。

ここからは樹林帯の急坂が続き、眺望もほとんど無く、ただひたすら歩きます。タマアジサイが見ごろで、私たちを励ましてくれました。

ジージーというエンゼムの鳴き声が、賑やかになり、色鮮やかなキノコ、まだ咲き残っているバイカツツジの花も見られました。

皆さんの足取りが好調で、予定より早く大塚山山頂に着きました。木々の間から、御前山の堂々とした姿が見られ、コバギボウシやヤマユリが出迎えてくれました。ここは小休止、すぐ出発です。

いよいよ、御岳山のレンゲショウマ



群生地、富士峰園地へ。三日前の下見では、ちらほらと咲き始めていたレンゲショウマ、今日はどうでしょうか。ドキドキしながら見回すと…、よかった！下見のときより花の数が増えていました。まだ、まん丸の蕾もたくさん目立ちましたが、可憐な下向きの薄紫の花が歓迎してくれていました。オクモミジハグマも負けずに咲いていました。

すぐ上に産安社があり、この近くの木陰で昼食、食事が終わった人から、もう一度レンゲショウマを見、写真を撮り、展望台からの景色を楽しみ、思い思いのランチタイムを過ごしました。

帰りは大槲峠を経由して、鳩ノ巣駅に向かいます。下山コースには、滑りやすい岩場もあり、慎重な足運びが求められます。クサアジサイやギンバイソウが見事でした。

夏の花を楽しんだこの山歩きも、鳩ノ巣駅で4時半ごろ解散。キバナアキギリの蕾が大きくなって秋の近いことを知らせていました。

(中村美智江)

## ～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その5 ～

### 週休に「見つけましたよー」

2月17日午後11時30分、寝入りばなを電話で起こされた。奥多摩交番から「16日の朝、本仁田山に1人で登った都内I区の男性Nさん(67歳)が未だ帰宅せず、I警察署から捜索の依頼が届いたがどうします」というものだった。「とりあえず明日出勤の隊員は、捜索の支度をして8時30分に交番に集合するように連絡をしてくれ」と言って電話を切った。外は雨が降っている。明日は第1回東京マラソンが行われるというのに、雨は昼ごろまで降り続くという予報だ。雨の中、都心を駆け抜ける3万人のランナーもかわいそうだが、本仁田山で救助を待っているかもしれないNさんには非情の雨であろう。冬場の雨の捜索も身体にこたえる。早く止んでくれと祈りながら布団にもぐった。

朝、雨の中出勤。未帰宅者Iさんは若い頃から登山を趣味としていたが最近身体を壊し、今回の本仁田山が復帰戦と家族に話し、鳩ノ巣から登山頂に立った後、大休場尾根を氷川に下りる予定で出掛けたという。

私は電車の中で本仁田山の迷いやすい場所を考えた。鳩ノ巣からの登りでは杉ノ殿尾根で迷っての西川に下るケース。山頂から氷川までの下りでは大休場尾根から支尾根に入り除ヶ沢に迷い込む。この二つに絞って捜索することに決めた。

今日捜索に参加できる救助隊員は6名。2個班に分れ西川と除ヶ沢を捜索することにする。雨はまだ降っているが、私は前川隊員、渡辺隊員とで除ヶ沢に入ることにした。

出発する前、Nさんの携帯電話がまだ呼び出すというので掛けてみる。さかんに呼び出し音が鳴っているが出る気配はない。圏外の多い奥多摩の山で、携帯電話が繋がるということは、除ヶ沢あたりが有力だ。

合羽を着て出発する。幸い雨も小止みになってきた。安寺沢集落から大休場尾根に登り上げる。この尾根は急な尾根だ。本仁田山から一気に除ヶ野集落に落ち込んでいる。昨年4月もこの尾根の途中でベテラン登山者が雷に打たれて死亡している。尾根上に登り上げた私たちは、山頂方向には向かわず、除ヶ野側に下り尾根末端の岩場周辺を、ザイルで下降しながら丹念に捜した。昼ころには雨も上がり、薄日が射し始めた。

3人は除ヶ沢に下り、今度は沢を登り上げた。除ヶ沢上流はワサビ田になっており、ワサビ搬送

用のモノレールが架けてある。上流の大きな岩場が見えるところまで登り、沢を引き返した。午後3時に奥多摩交番に戻った。西川捜索班も戻って来た。残念だが何の発見もなかった。

午後3時すぎ、遭難者の息子さんから電話が入り私が出て、今日の捜索について説明した。すると息子さんは「もう終わりですか」と聞いてきた。私は「いや、明日も捜します。明日はヘリや警備犬なども要請してみるつもりです」と言うと、「今日はもう終わりなんですか、日没はまだでしょう」と言う。私もカチンときたが、家族の心配を考えれば怒ってはならないと思い、諭すような調子で「雨の中出掛けて行って、今みんな降りてきたんだよ。これからまた捜しに行けというの。1時間やそこらで行けるところじゃないんだよ。町の中で迷子を捜したり、公園で落とされた財布を捜すのとは訳が違うんだから。あなたの方も午前中雨が降っていたでしょう。みんな雨の中ザイルで降りなければならぬようなところを捜しているんだから」。きつと語気が荒くなっていたと思う。「すみませんでした。私たちには山岳救助隊しか頼るところがないのですから」と言う。「とにかくこれから明日の捜索計画、ヘリ、警備犬の手配、応援要請など行います」と言って電話を切った。遭難者の肉親の心情は分からないでもない。でも、疲れて帰って来た救助隊員に「日没はまだでしょう」はちょっと言い過ぎだ。

翌朝はテレビも2局ほど取材に来た。警備犬なども到着し、警備本部となる奥多摩交番はごった返した。今日は警視庁航空隊ヘリも上空から捜索するという。

Nさんの家族も駆けつけた。Nさんの奥さんが私に「昨日は息子が大変失礼な事を申し上げまして。若い者ですから、本当に申し訳ありませんでした」と詫言った。後ろにいた若者も「申し訳ありません」と頭を下げた。私は、「いえ、今日も大勢で一生懸命捜しますから、あきらめないで待っていてください」と慰めの言葉をかけた。

携帯電話会社に依頼していた携帯電話による位置探査測定の結果も出た。それによると会社のアンテナは、氷川中学の裏側にある。アンテナからおおむね「東側は多摩川を中心に北に45度、南に45度の扇状に3キロ。西側は同じく多摩川を中心に北、南に25度ずつの扇状で2キロ」の位置と測定された。しかしこれでは本仁田山が全くの圏外に位置してしまう。もちろん迷っている確率の高い除ヶ沢も西川も圏外となってしまう。

あまり当てにできない。高い山などに電波が反射して正確な位置が測定できないのであろうか。

Nさんが山に入ってすでに3日経っている。登山道周辺にいたのであれば登山者もいたはずだから、もう見つかっているはずだ。捜索はあくまでも本仁田山を中心に、迷い易い場所、危険箇所を中心に実施することにした。

19日、20日、21日と航空隊のヘリ、警備犬を投入し大掛かりな捜索をおこなった。20日、鳩ノ巣駅に設置してあるモニターのビデオを見せてもらった家族が、当日改札口を出るNさんの姿を確認した。やはりNさんは鳩ノ巣から本仁田山に登っているのは確実とみられる。しかしNさんの携帯電話の電池はすでに切れていた。

私は除ヶ沢に固執した。10年ほど前も尾根から滑落し腕などを骨折しながら、6日ぶりに除ヶ沢に降りてきて救助された30代の女性もいた。

鳩ノ巣から山頂そして安寺沢と、この馬蹄形の内側にきつとNさんは迷い込んでいる。

しかし私は3日間除ヶ沢に入ったが、発見することができなかった。

2月22日、Nさんが行方不明になって1週間である。この日は警備犬、航空隊ヘリその他、機動隊にある山岳救助レンジャー隊員も加わり、総勢26名で、ゴンザス尾根、平石尾根、川苔山まで範囲を広げ、4個班に分かれ水源林巡視道などを中心に捜索した。それでも夕方遅く戻ったどの班も何の手掛かりをも掴むことができなかった。

もうこれ以上この捜索を続ける人的余裕はなかった。救助隊員の体力的にも無理があったし、隊員の殆どが駐在所員ということもあり、いつまでも駐在所を留守にすることはできないのだ。

家族に理由を説明し了解を得て、以後は「情報待ち」として大掛かりな捜索は打ち切られた。

翌々日、私は渡辺隊員、佐藤隊員とともに、まだ見ていなかった平石橋から安寺沢までの山腹にある遊歩道を捜したが徒労に終わった。

しかし、山岳救助隊しか頼るところがない家族のことを考えると気の毒でならない。それにプロの救助隊として、1週間も捜して発見できなかったことに対し、プライドが傷つくのだ。

2月27日、私は久しぶりの休日で家にいた。午前10時30分、佐藤隊員から電話があった。「見つけましたよ」と言う。「どこでだ」と聞くと「除ヶ沢です。ワサビ田上流の大岩手前の浅いルンゼを登って行ったら、80メートルほど上に滑落したNさんと思われる遺体がありました」と言う。「おまえ、今日休みじゃないのか」と聞くと、「休み

でしたが、ここがどうしても気になりましたので」との答えが返ってきた。「わかった。すぐ行く」。私は素早く着替えてパジェロに乗り込んだ。

Nさんはやっぱり除ヶ沢にいた。それも20日に3人で右岸にある大岩を上流から登り上げたのだが、その大岩手前のルンゼにいたのだ。大休場尾根からあの大岩の尾根に迷い込み、急なルンゼを下降しようとしたのだろう。携帯電話やストックは遺体から20メートルほど上で発見された。

遺体はルンゼから除ヶ沢までバスケット担架で降ろし、ワサビ田のモノレールを借りて下の車道まで搬送し、刑事課員に引き継ぐことができた。

遺族は大変喜んで、救助隊に感謝していたと翌日署長から聞いた。

「おい佐藤、おまえ休んで捜索に行くと誰かに言ってから登ったのか」「誰にも言いませんでした」「おまえ自分がびっくりかえったらどうするつもりだ。誰も知らないんだぞ」「すみません。今度からちゃんと連絡していきます。でも見つかったからいいじゃないですか」「おまえなあ…」。

佐藤隊員はまだ3年目の一番若い隊員である。体力もあるし、いい勘をしている。でもアブナイな、手綱を引き締めなくちゃ。

春めいてきた4月23日、交番に在所していた私のところに今日週休の佐藤隊員から電話が入った。「Uさんのバッグ見つけましたよ」「えっ、どこでだ」「大寺山から深山橋に下る尾根の三頭橋側に派生する支尾根です」。バッグの下の急なルンゼには衣類なども見えるという。ザイルが足りないので持ってきてくれというものであった。

Uさんはちょうど1年半前の11月、山梨県との都県境にある大寺山に登ったまま行方不明となった。山岳救助隊が1週間捜索したが発見できず、山梨県側の可能性もあり、捜索は打ち切りとなっているものだった。

救助用具を担ぎ、3名で深山橋から入山した。尾根の途中で佐藤隊員が待っていた。週休で捜しに来て、支尾根の上流側のルンゼを登り上げ、そして反対側のルンゼを降りようとしたら、途中に引っ掛かっているバッグを発見した。中を見るとUと記名のある診察券が入っていたという。

「おまえ、休んで捜索に入ることは、誰かに言ってきたのか」「すみません。誰にも言ってきません」「おまえなあ…」。こいつはこれで、もう山岳救助隊から抜け出すことはできないだろう。

(青梅警察署山岳救助隊副隊長 金 邦夫)

# 奥多摩昔語り

## 奥多摩の地名(7)

鳩ノ巣駅で降りて、溪谷に架かる雲仙橋を渡り、坂下の集落を経て松ノ木峠を右に折れると、越沢(こいざわ)川に沿って、御岳神社の裏参道が越沢から大楯峠、御岳山へと続いています。

この松ノ木峠から裏参道を少し登った所の道の上に、天目指(あまめさす)という地名があります。天目指とは、あまめ柿(豆柿)が目印になっている焼畑のところという意味で、指(さす)とは、昔から焼畑が行われてきたところに付けられる地名です。ここには、数軒の人家があり、昔は、山仕事や畑仕事によって生計を立てていました。

昔、天目指にタクという老婆が住んでいました。ある晩のこと、金比羅岩(越沢バットレス)の天狗様が夢枕に立って、「お前は、正直者だから、水汲みの時だけ、飛べるようにしてやろう。」というお告げがありました。

タクは桶を片手に持つと、大岩からひとつ飛

びで越沢川を飛び越え、金比羅岩の下から湧き出す清水を汲み上げると、再び谷を飛び越えて、家へ帰りました。いままでは、上流の遠い沢まで水汲みに行くのが仕事だったことが嘘のようで、お陰で畑仕事や家事がはかどり、大喜びでした。そのうち、片方の桶だけではもったいないと思い、両手に桶を提げて汲みに行こうとしました。すると、天狗様の声が出て、「そんなに欲をかかなくてもよい。」と、片方の桶だけしか許しませんでした。

御岳山の裏参道の途中、越沢川を見下ろすと、足がすくむような絶壁の上に、「タク婆岩」といわれる岩があります。

(岡部義重)

【資料】 奥多摩町誌、 広報  
おきたま、  
民話は清水てふさんより聞き  
書き



## 山の花だより

### ～ イケマ ～

山地の林道脇など開けた場所で見られるつる性草本で、他の樹木に絡みつきながら育つにつるに、夏、白い細かな花を球状につけます。この植物は、シカが忌避するためか、シカ食害が顕著になってからは、奥多摩では目立つ植物となりました。

この植物は、長距離飛翔で有名となったアサギマダラの食草として、また、ネットで得た情報では春先に伸び始めたつる先は食べられるそうです。

ある年の5月、川乗山の防火帯で先が摘まれたイケマを見た時には、「え？これもシカが食べるの？」と驚いたことがあります。しかし、場所柄を考えると、山菜好きな人の仕業だったのかもしれませんが。

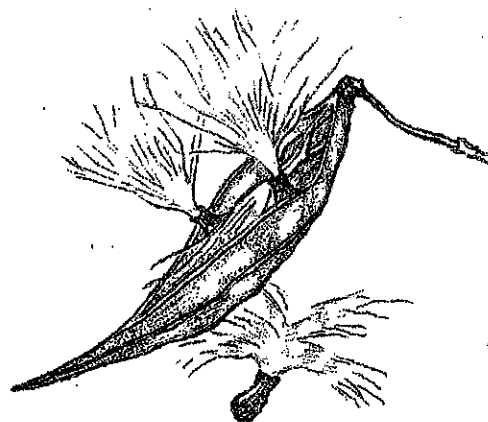
植物は、いろいろな工夫で、その種子を遠くまで運ぶ手立

てを考えていますが、この植物は、一つひとつの種子に綿毛をつけて風に委ねるタンポポと同じ方法をとっています。種子を収めている実はオクラに似て、オクラよりさらにスマートな鞘状の形となります。秋が深まり、鞘状の実の中で整列して収まっていた種子は、鞘の上部の稜の部分ではじけた後、そこから新たな地へと旅立ちます。

2センチほどもある艶やかな絹毛に加え、5ミリほどの種子は、さらに風に乗れやすくする工夫なのでしょう。狭いながらも翼を付けへら状を呈しています。

直線状となり収まっていた絹毛が、種子が鞘から飛び出したとたんに綺麗に開く一瞬は、自然の仕組みの素晴らしさに、思わず感嘆の声を発する一瞬でもあります。

(堀越弘司)



## ガイドだより ~今年の御前山異変~

奥多摩三山の一つ、御前山(1405m)は、東京で一番高い所に群生している、カタクリが咲く山として脚光を浴びています。

カタクリ登山、案内する私たちガイドが、メインイベントの行事として楽しみにしています。

今年は、おかしい…。暖冬異変なのか降雪日も少なく、シーズンが近づいてくるとカタクリがどうかたと気がもめます。

去る4月20日、ガイド担当仲間と実踏に参加しました。1週間前から天気がぐずついていたので心配していたら、4月18日、奥多摩地域で雪が降ったとの情報をキャッチ。奥多摩の山々が白く連なっています。

実踏当日は、アイゼンを携行しました。

コースは、奥多摩湖右岸の歩道が「いこいの路」として整備され、期間開放されたので、水久保沢登山口から小河内峠へ向かいます。途中残雪があり滑りやすい。

小河内峠で積雪が約10cm(この時期珍しい)。惣岳山まで頑張ったが雪が深くなり、アイゼンを装着しました。

期待のカタクリは雪の下でした。残念!

歩き出すと始末が悪い。春の雪で湿っており数歩歩くと高下駄になり歩きにくい。御前山山頂手前(約20m)でコース変更して下山しました。

帰着後のミーティングで、本番を実施するかどうか検討した結果、参加者の安全が保てないので中止と決定しました。

山好きな私たちの仲間からも、4月下旬での積雪約20cmとは珍しいとのことでした。

今年の夏も、猛暑、酷暑といわれ地球温暖化が心配されます。

(岩倉秀夫)

## 施設案内

### ☆ 森のカフェ『アース+ガーデン』

純日本風の外観に内装はアジアのリゾート感を演出。無農薬、有機栽培の食材を使って身体にも心にも美味しい料理を出します。

奥多摩の家庭で食べられてきた料理を提供します。ご来店をお待ちしております。

(営業時間: 10時から18時)

場所 青梅線白丸駅下車 徒歩約8分

電話 0428-85-5101 水曜、木曜日休業

## イベント案内

奥多摩町と観光協会では、秋から冬に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2名様まで)を明記の上、奥多摩観光協会へ。(抽選の場合あり)

① 10月25日(木) 秋の海沢三滝めぐり  
応募締切日 10月10日(登山)

② 11月6日(火) 紅葉の奥多摩湖いこいの路に  
親しむハイキング  
応募締切日 10月22日(ハイキング)

③ 11月15日(木) 紅葉の倉戸山を訪ねる  
応募締切日 10月22日(登山)

④ 11月22~23日(木・金) 初冬の巨樹コース  
日原散策・わさび田作り体験(宿泊)  
応募締切日 11月8日(登山)

\* 募集人員: 各回30名、参加費: 500円  
(④は11,000円)

### 《 編集後記 》

いよいよ秋の観光シーズン。「大きな秋」を見つけに、紅葉、黄葉(来うよ、来うよう)!

次号は、平成20年1月15日に発行します。

発行: 奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集: 名人・達人観光ガイドの会

【木版画: 安藤修二】